

ポラリスにウインクを

雨和七瀬

君とは関係ないが
君と近づきたくなつたんだ
見上げて、目指すようになった

君とは十歩の距離だった
君の名前はきれいだから
こんな僕でもすぐに覚えた
君と言葉を交わすと
誕生日も教えてくれなかった
でも君のことを知った気になった

君とは相変わらず離れたままだ
でも夕焼けが僕を包んでいた
それで良かった
僕は君になれないけれど
僕は羽ばたけると思った
極北の星が一番星とは限らない
僕の好きなように飛び立った

君と数十歩の距離ができた
味のある自画像が描かれた紙
君を知らないということを知った
君の好きな色の理由
僕と真逆なのが面白くって
君の将来の夢まで想像したんだ

君と十歩の距離に戻った
君は僕に語り掛ける
意外だなんてこっちの台詞
眩しいような気がして
触れたら燃え尽きる気がして
目を逸らしてしまった
ああ、間違えたんだよ、僕

君とは百歩の距離になった
僕の与り知らぬ間に君は
君の名前は
僕の上で輝くようになった

君と数歩の距離に替わった
君とまた話がしたい
でも君の眼差しが向くことはない
邪魔しちゃいけないと
視線を落とした先の文字
入ってくるわけなんかはない
鼓動だけが思いに相槌を打った

君とは歩めないほど遠くなった
彗星を見上げて飛ぶ僕は
日々君のことを思い出す
見渡したって居るわけがない
君の目印くらい聞いておけばよかった
どっちが北かも分からないまま
君とのもしもを想って飛ぶ

でも知ってるんだ
本当に離れてしまったのは
十数光年もの距離だって
僕が「君」と呼ぶ君はもう

僕の心の中にしか居ないんだ
思い出を加工してできた星の砂
溜まって、重くなって
それでも羽ばたいて
ねえ、見ててよポラリス
僕だってこの天球で
君と同じくらい輝いて見せるから